

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話「花鳥風月及び星・虹を愛でながら」から

主宰論説20

メルボルン市及び周辺探訪記

平成20年（西暦2008年）9月21～25日の5日間オーストラリアのメルボルン市で、「持続可能な建築に関する世界会議（2008）(sb2008)」が開催された。福島敏夫は、「LCA マルティエコインディケータによる建築用複合材料の環境調和性評価」といタイトルでの研究発表のために参加した。昭和57年（西暦1982年）の中期留学の際、アメリカおよびカナダに赴いたとき以来、夫婦同伴で出かけた久しぶりの海外旅行でもあった。これは、北九州市立大学在籍時、この国際会議に参加するまでの旅の途中、国際会議前後・途中でのメルボルン市内の観光および会議後の周辺の「グレート・オーション・ロード」やフィリップ島等の景勝地を訪れた際に、感じたこと、気付いたことを含めて、よもやま話を記した紀行文である。老妻が、日々の行動を克明に記録していたのがベースになっている。

1) メルボルン市に到着し、無事ホテルにたどり着くまで

通常は、メルボルン市までは、福岡国際空港からシンガポール・チャンギ空港を経由して、カンサス航空で赴くのだが、その年は、メルボルン国際マラソンで込み合っており、国際会議開催の期日に間に合うような切符が取れなかった。それ故、キャセイパシフィック航空を利用して、香港経由で行くことになった。福岡とメルボルンは、時差はあまりないはずであるが、トランジットの香港国際空港での2時間半の待ち時間も含めて、メルボルン国際空港に到着するまで、16時間とかなり時間がかかった。また、予約したはずの「アイリス・ホテル」が、メルボルン市内の本店ではなくて、市のはずれにある系列のもう一つ小さな同名のホテルであったらしく、タクシーを使って、たどり着き、ようやく9泊の手続きを済ませることができたが。帰りの航空便もスケジュール的に、会議後4日後になるなど、最初から、トラブルに巻き込まれ、前途多難な旅になりそうな予感がした。

2) 国際会議の概要とコンファランス・ディナー

この国際会議 (sb08) は、CIB (建築研究国際協議会) および CSIRO (オーストラリア連邦科学産業研究機構) 共催で行われた「持続可能な建築」に関する2回目の国際会議であり、2005年、CIB と日本の国土交通省共催で、東京で行われた「持続可能な建築世界会議 2005(sb05)」に続くものである。メルボルンコンベンション・ビューローが会場であり、「材料および構造工学における環境調和型設計法」に関する RILEM (国際材料・構造試験研究機関連合) / CIB 合同国際委員会のメンバーの一人でもあった CSIRO のフォーリン博士も組織メンバーの一人であった。日本からは、独立行政法人建築研究所の理事長の村上先生も参加されていた。ハイアット・ホテルで開催されたコンファランス・ディナーでは、(株)積水ハウスから参加されていた女性と隣り合わせになり、歓談を楽しんだ。

3) 市内観光と食事

南半球であるので、季節は春で、日中は、温かく、桜、シクラメン、チュウリップが咲いているようだ。風が強く、寒いときもあり、ノースリーブの人もいれば、ウィンド・ブレーカーの人もある。メルボルンは、シドニーに次ぐオーストラリア第2の都市であり、キャンベラができるまでは、首都だった。イギリスのビクトリア朝時代の古い建物も多数残っているようだ。市内には、トラムカーが機略縦横に走っていて、市内観光や買い物等には、便利であるようだ。国際会議の日程終了後、一日の市内観光を行った。クイーンビクトリア・マーケット、フラッグスタック・ガーデンなどを訪れた。クイーンビクトリア・マーケットは、食料、衣類などあらゆるものを扱っている市内大市場である。寒いときに備えて、ウィンド・ブレーカーを購入した。

また、フラッグスタック・ガーデンを訪れた。このガーデンは、イギリスからの入船、出船の度に、旗竿（フラッグスタッフ）に旗が掲げられ他ことが、名前の由来らしい。夕食のために、レストランで、ステーキを食したが、最低 300 g もあり、たべきれないくらい。オーストラリア・スタイルらしく、多すぎるくらいであるようだ。

老妻は、福島敏夫が国際会議に参加しているとき、一日チケットを使って、一人で市内観光をしたらしい。

4) 「グレート・オーション・ロード」探訪記

このロードは、退役軍人らが切り開いたという海岸道路である。道路沿いの海岸には、多くの絶景ポイントがある。「石灰岩」が浸食されたできた奇岩である「12の使徒」、ロンドンからの最後の移民船が難破し、54人中2人しか生き残れなかった場所である「ロンドン・ブリッジ」などがあった。それにしても、オーストラリアのメルボルン近傍の海岸地帯に、よくもこのような奇岩の絶景が形成されたものだと、感心することしきりであった。途中、マイツレストの熱帯雨林を散策。ケネット・リバーの動物園で、火食鳥、コアラ、ウォンバット、カンガルーを見た。オーストラリア固有の動物類であるが、最近、生存数が減っていて、絶滅の恐れがあるということである。持続可能な発展のためには、生物多様性にも配慮すべきでないかという強い思いに襲われた。ガード付きの早朝から夕方までの約12時間のツアーであった。疲れて、死んだように眠った。

5) フィリップ島のペンギンの行進探訪

フィリップ島を訪れ、サマーランドビーチで、日没から、愛らしいリトル・ペンギンの行進を見学した。それにしても、海岸からかなり離れた叢の巣まで、多数のリトル・ペンギンが、隊列をなして、よちよちと行進し、海で捉えた餌をひなに与えるという行為は、天敵から身と雛を守り、小動物種の子孫繁栄のために身に着けた術として、感動ものである。また、コアラ保護センターを訪れた。コアラは、ユーカリの葉しか食しないという不思議なオーストラリア固有の珍獣であるが、20時間ぐらい、ユーカリの木の上で眠っているという。人間は、幾ら寝ても、8~10時間ぐらいといわれる。よくそんなに眠れるものだと思うことしきりであった。

6) 「ブルー・ダンデノン、パフィンビリ、ヤラ・バリー、ヒールズビル、サンクチュアリ探訪

ダンデノン丘陵で、木生【シダ】の様子を鑑賞。温帯雨林地帯で、恐竜がいた時代から今に残る植物の一つで、木のように茎を伸ばすようである。500種類のユーカリの木があり、100m近くの高さになるものもある。コアラは、そのうちの数種類しか食べないという。好き嫌いで、生き抜けるものかなと思った。パフィンビリで、峡谷鉄道で、蒸気機関車に乗って20分の鉄道の旅を楽しんだ。旧建設省建築研究所（現在国立研究法人建築研究所）入省時、親睦のために、当時の同僚らと行った日本の大井川鉄道における蒸気機関車の旅以来である。最近、気候変化への対応の動きの中で、蒸気機関車は、廃止される趨勢にあるようだが、すべて失くしてしまうのはどうなのかなと思った。ヒールズビル・サンクチュアリで、ゆっくりコースで、案内人について、コアラ、カンガルー、カモノハシ、ペリカンなどの動物の動態を観察した。それにしても、オーストラリアには、不思議な動物固有種が多いものだと思った。

7) メルボルン市を後にして到着し、無事北九州市の教員宿舎にたどり着くまで

真夜中に、キャセイパシフィック航空でメルボルン国際空港を出発し、香港国際空港を経由して（ドラゴン航空とキャセイパシフィック航空の飛行機の同時運航）、福岡国際空港に翌日の昼（2008年9月30日）に到着した。その後、特急で、博多から折尾駅に到着後、バスを利用して、「ひびきの」にある教員宿舎についた。何とか無事に行って帰ってこられて、安堵した次第である。

8) 後記

今回、腰が痛い、足が弱いなど、健康状態に不安もあったが、結果的にはうまく運び、何とか無事に行って帰ってこられた。老妻との二人三脚の「弥次喜多道中」であった。

地球における水と炭素と窒素の物質循環

地球では、地圏、水圏、大気圏及び生物圏で、水、炭素、窒素などの元素及び物質の循環が起こる。この時の源は、太陽からさんさんと地球に降り注ぐ太陽エネルギーである。また、地球に存在するエネルギー・資源は、再生産可能な水力、風力、森林、生物などの非枯渇性資源と、再生産不可能な枯渇性資源である鉱物、化石、岩石資源に分けられる。人類は、これらのエネルギー・資源を利用して、生活を豊かにし、使い終わった後は、地球に戻すというサイクルで成り立っていた。すなわち、これらの基本元素の物質循環によって、正常な地球の生態系、気候も保たれていた。しかし、枯渇資源の利用に頼りすぎた大量生産・大量消費・大量廃棄型の欧米型物質文明と人類の長年の諸活動の結果、このサイクルが描けなくなり、地球環境問題等の諸々の難問に直面している。非枯渇性エネルギー・資源の利用率を上げるとともに、枯渇性資源は、3R（Reduce(廃棄物減容化)、Reuse(再使用)、Recycle(リサイクル))の徹底化を図る必要がある。国連でも提唱されてい

る持続可能な開発（SDGs）の一環として、再度、持続可能な資源循環型・環境調和型の建築・都市・地域・国土・地球・社会の形態に軟着陸させる必要が叫ばれている。

夢と希望と光

自然災害と伝染病と持続的な経済の回復の同時解決は、かなり難しいと思われるが、人類の英知を結集して、乗り越える必要があるようだ。2011年に起こった東日本大震災や原発事故および相次いで起きた想定外といわれた余震、風・水害で、日本は自然災害に見舞われやすいということを改めて思い知らされ、また、これまでの価値観の変更も免れなかった。今年の冬は、暮れから年の初めおよび2月後半まで2度にわたり大寒波と冬の嵐に見舞われた。北海道・東北・北陸・山陰地方では、暴風雪という雪害があり、日本全国でも、大雪に見舞われた。北米でも、想定外の大寒波と降雪による停電等の報道がなされている。南米のペルー沖での海水温が1～2℃低くなっているラニーニョ現象によるとも言われているようだ。世界中での新伝染病が、なかなか沈静化せず、1年延期となった東京オリンピックも、無事開催されるかの懸念もある。だが、梅、桃、桜が開花する春の訪れも間もないという兆しがみられる。植物は、季節がくれば開花し、毎年、生命の息吹を発露するという事は、素晴らしいことではないかと思う。能天気といわれようが、再度、夢と希望と光が見えてくることを期待したいものである。

令和3年2月19日

自由俳句：雪の中芽を膨らませるフキノトウ

自由短歌：春時雨大浪小波にもまれても描いた希望は生きるためのすべ